ISSN　1344-9095

TOHOKU UNIVERSITY

東北大学　東北アジア研究センター　ニューズレター

The Newsletter CNEAS

第 68 号

● 目 次 ●

巻頭言　東北アジア研究センター創設 20 周年記念国際シンポジウム
「東北アジア　地域研究の新たなパラダイム」の開催 …… 1
最近の研究会・シンポジウム
センター共同研究「東日本大震災後の復興過程に関わる地域社会比較と民族誌情報の応用」…… 3
センター公募型共同研究「モンゴルの聖書翻訳をめぐる学際的研究
―東北アジア宗教文化交流史の文脈から」研究会…… 3
東北アジア研究センター・シンポジウム「共生の東北アジア：中蒙・中露辺境を事例として」…… 4
表彰…… 4
客員紹介…… 5
著書紹介…… 6
海外出張のトラブル ―その傾向と対策―「中国国際航空乗り継ぎ事情」…… 7
活動風景「タンザニア再訪、ダルエスサラーム便り 2016」…… 8
編集後記…… 8

巻頭言　東北アジア研究センター創設20周年記念国際シンポジウム「東北アジア 地域研究の新たなパラダイム」の開催

東北アジア研究センターセンター長
岡　洋樹

1996 年 5 月に東北大学学内共同利用施設として設置された東北アジア研究センターは、今年 2015 年に 20 年目を迎えた。1990 年代半ばの当時は、20 世紀の国際政治の枠組みの大きな転換点にあたり、その先行きを見通すのは困難であった。ただ、我が国にとって、冷戦体制の解体により、すでに改革開放を進めていた中国ばかりでなく、ロシア、モンゴルとの関係も改善されるであろうことが期待されていた。そのような時代の要請が、東北アジア研究センターを生み出したのである。一方学術・教育界においては、文系・理系に分化した既存の研究態勢の限界が指摘され、異分野の学際的融合、とくに文理融合の必要性が叫ばれていた。新たに設置された東北アジア研究センターは、文学部、理学部、工学部、大学院国際文化研究科、生命科学研究科、言語文化部などから文理の研究者が集まり、東北アジア地域に関する学際的・総合的研究を使命として設置されたのであった。20 年を経た今日、東北アジアはいまだ多くの問題を抱えている。しかし地域諸国間の交流は確実に緊密化しており、東北アジア研究の必要性はますます高まっている。

創設 20 周年を迎えて、東北アジア研究センターは、これまでの研究蓄積を総括するとともに、わが国にとって死活的な意義をもつこの地域の研究の新たな展開を模索することを目的として、「東北アジア　地域研究の新たなパラダイム」と題する記念国際シンポジウムを企画することとした。

シンポジウムの準備は、特任助教二名を配置した企画運営室を中心に進められた。センターの構成員は、それぞれの専門領域を生かして東北アジアの当面する課題を扱うセッションを担当した。シンポジウムは記念式典・記念講演会・総合セッションと 11 の個別セッション、それに三つの関連企画で構成することが決まった。

12 月 5 日（土）午後の記念式典では、センター長挨拶の後、東北大学里見進総長の祝辞（研究担当理事伊藤貞嘉氏代読）に続き、文部科学省研究振興局学術機関課長牛尾則文氏、モンゴル科学アカデミー歴史研究所長 S. チョローン博士、人間文化研究機構長立本成文氏及び北東アジア研究交流ネットワーク代表幹事谷口誠氏の祝辞（代読：千葉康弘副代表幹事）が読み上げられた。

記念式典に続いて開催された記念講演会では、京都大学人文科学研究所の山室信一教授が「思想課題としての東北アジア」と題して、日本近代の歩みの中で東北アジアがもった意味を歴史的に回顧しつつ、この地域を研究する意義を論じ、国立科学博物館の篠田謙一博士が、「DNA から見た日本人の形成と北東アジア」と題して、

最新の DNA 分析の成果を用いて、人類の分布と移動、とくに東北アジア地域の住民の遺伝的な構成を明らかにした。人文学と理学の立場からの講演は、時間的スケールを異にしながらも、東北アジアをその過去と現在を通して可視化する興味深いものであった。

記念講演終了後、総合セッションが開催された。このセッションでは、わが国で東北アジア地域に関わる研究を行っている四組織のセンター長が、それぞれのパースペクティヴから活動の現状と今後の展望を語った。島根県立大学北東アジア地域研究センター長井上厚史教授は、「〈北東アジア学〉創成に向けての課題」、北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター長田畑伸一郎教授は「スラブ・ユーラシア研究における東北アジア」、富山大学極東地域研究センター長今村弘子教授は「東北アジア研究：日本海側の拠点として」、東北大学東北アジア研究センター長岡洋樹教授は「東北アジア：歴史的パースペクティヴ」と題する報告を行った。四つの組織は、平成 28 年度から大学共同利用機関法人人間文化研究機構の機関研究プロジェクト「北東アジア地域研究」に参画し、同機構の国立民族学博物館、国立総合地球環境学研究所、国立日本文化研究センター、国立歴史民俗博物館とチームを組んで東北アジア（北東アジア）研究の全国的・国際的展開に乗り出すことになっている。

記念シンポジウムでは、個別課題による 12 セッションが組まれた。セッションは、東北アジア地域の基盤としての自然環境と、そこに暮らす人々と自然との関係を論じるグループ A「東北アジアの自然環境：自然史」、東北アジアの地域大のスケールで繰り広げられる人やモノの移動と越境、あるいは広域の問題を扱うグループ B「東北アジアの社会環境：越境」、そして本センターが社会貢献的研究として注力してきた地域の文化・自然遺産の保全継承をテーマとするグループ C「東北アジアにおける遺産の保全と継承」という三つのセッション群で構成された。

自然環境とその中での人の暮らしを考えるグループ A では A1「東北アジアの地殻変動――バンサラッサから環太平洋まで」（世話役：平野直人准教授）、A2「東北アジアの生物多様性の起源」、A3「東北アジアの人類誌と環境適応」の 4 セッションが開催された。地域の越境的課題を問うグループ B を構成したのは、B1「個人史からみる東北アジアの人の移動――マルチサイトな人類学の挑戦」（瀬川昌久教授）、B2「近現代における東アジアの移住者の生活実践――マルチサイトな人類学の挑戦 II」（李仁子大学院教育学研究科准教授、センター兼務教員）、B3「東アジアの環境問題をめぐる国際協力：その到達点と課題、そして未来」（石井敦准教授、明日香壽川教授）、B4「モンゴル史及び東北アジア史における大清国の歴史的位置」（岡洋樹教授）、B5「東北アジアにおける戦後秩序の形成」（寺山恭輔教授、上野稔弘准教授）

伊藤貞嘉理事による総長祝辞代読

山室信一教授による講演

篠田謙一博士による講演

記念式典・講演会会場の様子

S. チョローン博士からの記念品贈呈（モンゴル語で「東北アジア研究センター」と書かれた掛軸）

の五セッションである。遺産の継承を論じるグループ C では、C1「東北アジアの言語資料の電子化利用」（栗林均教授）、C2「歴史資料の保全と活用――19 世紀日本の村落社会と生命維持」（荒武賢一朗准教授）、C3「西シベリアの湿地生態系の食物網と寄生関係」（鹿野秀一准教授）、C4「狩野文庫の特徴について――明治の博物学者狩野亨吉の視点」（磯部彰教授）の四セッションが開催された。

この他に関連企画として三つの会議が開催された。一つは本センター高倉浩樹教授を世話役として、東北大学東京分室で開催された「地震災害後の人文学プロジェクトの回顧と研究者の役割の探究（ワークショップ）」である。他の二つは電磁波応用工学の立場から東北アジアなどをフィールドに活動している佐藤源之教授に関わる企画である。一つは Korea-Japan Joint Conference on Electromagnetic Theory, Electromagnetic Compatibility and Biological Effect (KJJC2015) で、11 月 23 ～ 24 日の二日間、同じ仙台国際センターを会場として開催された。冒頭で東北アジア研究センター長岡洋樹による「Looking at Northeast Asia: Sendai's Perspective」と題する講演が行われた。続く 11 月 26 日～ 27 日には、東北大学片平さくらホールを会場に、第 13 回地下電磁計測ワークショップ：レーダー技術を用いた遺跡調査」が開催されている。

東北アジア地域の研究は、21 世紀の今日、ますます重要性を増している地域研究の分野である。本センターには、これまでの成果・蓄積を土台として、東北アジア地域研究の拠点として一層の成長を遂げていくことが期待されている。

最近の研究会・シンポジウム

① センター共同研究

「東日本大震災後の復興過程に関わる地域社会比較と民族誌情報の応用」 2015 年度第 3 回

共同研究「東日本大震災後の復興過程に関わる地域社会比較と民族誌情報の応用」では、2015 年度第 3 回研究会を 2 月 7 日に東北アジア研究センターにて開催した。

今回は、3 カ年の共同研究の最終年度の最後の研究会である。プログラムは大きく 2 部に分かれており、第 1 部は、被災無形民俗文化財調査の 3 県比較を行った。岩手県については、さいたま民俗文化研究所の大舘勝治氏、宮城県については東北歴史博物館の小谷竜介氏、福島県については郡山女子大学短期大学部の一柳智子氏に発表していただいた。民間の研究所、大学、学会など調査主体の違いや調査手法の違いなどについて比較を行った。3 者の発表を受けて、東京文化財研究所の久保田裕道氏、明治学院大学の吉田優貴氏にコメントいただいた。被災無形民俗文化財調査においては、災害以前の文化財の把握、リスト化が重要であるとの認識があり、東日本大震災の経験を踏まえて今後想定される南海トラフ地震などへの対策として取り組みが始められているという。

第 2 部は、震災についての個別の研究発表であった。伏見英俊氏（智山伝法院）は、被災地における寺院の復興状況について、堀川直子氏（福島大学）は東京に避難している原発被災者について報告した。福田雄氏（東北大学）は、東日本大震災の追悼行事とインドネシアアチェの津波災害の追悼行事の比較を行った。及川高氏（沖縄国際大学）は、沖縄における避難者の特徴や支援の状況について報告した。梅屋潔氏（神戸大学）は、気仙沼の事例をウガンダの土砂崩れ地帯と比較し、災害が繰り返される土地へと戻っていく人々の営みについて報告した。

東日本大震災後丸 5 年が経とうとする今年度は、本共同研究に新たな参加者が増えた。被災地が「復旧」を終え「復興」へと向かう中で、震災研究も、日本だけでなく海外へ向けた文化財防災や、地震による被害である震災からより大きな災害という枠組みで研究を継続していく方向性が見えてきた。

（山口　睦）

② センター公募型共同研究

「モンゴルの聖書翻訳をめぐる学際的研究—東北アジア宗教文化交流史の文脈から」研究会

第 1 回（11 月 14 日）、第 2 回（2 月 14 日）

山浦玄嗣氏（第 2 回研究会）

共同研究「モンゴルの聖書翻訳をめぐる学際的研究—東北アジア宗教文化交流史の文脈から」では、11 月 14 日に長崎大学東京事務所において第 1 回、2 月 14 日に東北アジア研究センターにおいて第 2 回の研究会を行った。いずれの研究会でも、宗教学、文学、言語学、仏教学など多角的な観点から活発な議論が行われた。

これまで、モンゴル語訳聖書について包括的に論じられることは少なかったが、本共同研究では、1815 年以降現代に至るまでの 120 を超えるモンゴル語聖書諸版（再版、復刻版、分冊版を含む）を整理することで、その全体像を描き出してきた。また、その文体や用語選択に関する諸版のあいだの相違や影響関係が明らかになりつつある。

しかし、その歴史的・社会的・文化的背景の解明にはまだ不明な点が多く、既存資料の読み直しや新たな資料の発掘が課題となっている。そのような意味で、都馬バイカル氏による 1952 年版聖書翻訳者たちについての聞き取り調査や、新たな映像資料の発見等は、一つの重要な成果である。ハイ・セチンゴアー氏によるインジャンナシの作品における宗教的語彙の分析も、聖書における訳語成立の背景を探る上で興味深い。また、モンゴル仏教の専門家である金岡秀郎氏からモンゴル語仏典翻訳論についての報告があり、比較研究の可能性が広げられた。

第 2 回研究会では、ゲストスピーカーとしてケセン語訳聖書翻訳者である山浦玄嗣氏を招聘し、文体や用語選択に関して実践者の立場からお話しいただいたが、それはモンゴル語聖書翻訳の問題を議論して行く上で極めて貴重な示唆となった。

（滝澤克彦）

③ 東北アジア研究センター・シンポジウム

「共生の東北アジア：中蒙・中露辺境を事例として」（平成 28 年 2 月 13 日）

本シンポジウムは、本センター岡洋樹教授を代表とする共同研究グループが中心となって、東北大学片平さくらホール 2 階会議室を会場として開催された。シンポジウムでは、ロシアと中国の国境縁辺地域や、清代中国の内地諸省とモンゴルが接する地域を対象として、政治的な境界を越えた人の往来と、それが生み出す共生の在り方の事例が論じられた。

セッション 1「共生の東北アジア：中露辺境の場合」では、南ウスリー地域開拓に伴う植民を論じたトカチョフ・セルゲイ（極東連邦大学）「南ウスリー地域における土地開拓を例としたマルチエスニックな植民について」、満洲でロシア人企業家が起こした商会の歴史を論じた藤原克美（大阪大学大学院言語文化研究科）「満洲国下のチューリン商会における多民族共生」、20 世紀初めの極東への中国人労働移民を論じたサヴェリエフ・イゴリ（名古屋大学大学院国際開発研究科）「戦前の極東ロシアへの中国人の移住と第一次世界大戦期の北西ロシアにおける中国人契約労働者」の三報告と、麻田雅文（岩手大学人文社会科学部）・堀江典生（富山大学極東地域研究センター）によるコメントがなされた。

続くセッション 2「共生の東北アジア：清代中蒙辺境の場合」では、主に長城線に沿ったモンゴル人地域における漢人とモンゴル人の関係を論じるソドビリク（内蒙古大学蒙古学学院）「清代チャハル南部長城縁辺地域における蒙漢人の共生」、岡洋樹（東北大学東北アジア研究センター）「清代中期の家畜窃盗事案からみるモンゴルにおける人の移動と共生」、包フフムチル（同）「清代後期内モンゴル・ハラチン地方における土地利用とモンゴル社会」の三報告がなされ、広川佐保（新潟大学人文学部）、橘誠（下関市立大学経済学部）からコメントがなされた。

境界地域については民族・住民間の対立が注目を集めがちであるが、その背後には人の活発な移動と生活の基盤となる共生関係が存在した。本シンポジウムの諸報告は、辺境社会を見る複眼的な視点の必要性を示した。

（岡　洋樹）

表彰

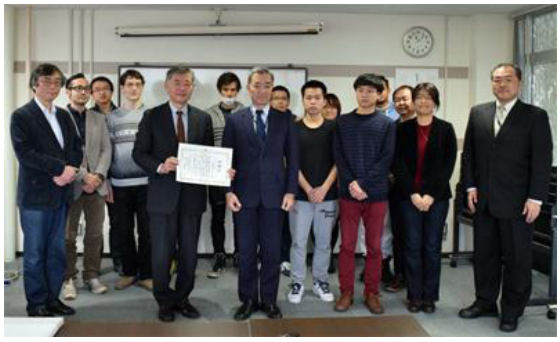
●捜索活動に対する感謝状が贈呈されました

◎御嶽山噴火災害による行方不明者再捜索

東北アジア研究センターが長野県より御嶽山噴火災害による行方不明者再捜索に係わる知事表彰を受け、2015 年 10 月 22 日には表彰式が行われました。表彰式には高橋一徳助教が出席し、阿部守一長野県知事より感謝状を授与されました。本表彰は、御嶽山噴火災害による行方不明者再捜索に協力し貢献した 62 団体に贈られました。本センターでは、資源環境科学研究分野（佐藤研究室）および減災をめざした電波科学研究ユニット（代表 佐藤源之教授）において、高橋一徳助教が地中レーダおよび金属探知機を用いて行方不明者の捜索に参加しました。今回の表彰はこの貢献が評価されたものです。

◎東日本大震災津波被害者捜索

東北アジア研究センター佐藤源之研究室では、研究室が開発した大型地中レーダ「やくも」を利用して、宮城県、福島県、岩手県の沿岸部において東日本大震災の津波被災者捜索活動を各県警と協力しながら進めてきました。こうした活動に対して、2016 年 1 月 12 日福島県警察本部から感謝状が贈られました。



客員紹介

●客員教授

デレジェ・アヤリュー

エチオピア、アジスアベバ大学のデレジェ・アヤリュー教授は、エチオピア中北部の Woldia 市に近い Tikurwuha という小さな街出身の研究者です。アジスアベバ大学において、1994 年に地質学の修士号を取得した後、フランスへ飛び、クレルモン＝フェランにある Blasé Pascal 大学で学びつつ 1996 年に火山学および地球化学の DEA（修士号に相当）を取得し、さらに 1999 年には、ローレヌのポリテクニーク研究機関（INPL）において博士号を取得しました。その後エチオピアのアジスアベバ大学に戻り、現在に至ります。エチオピアでは、同氏が新たに建設した Wollo 大学の学長も務めていました。査読付き国際誌の掲載数は 50 を越え、現在も引き続き精力的に研究を進めています。東北大学以外にもハンブルグ大学（ドイツ）、CRPG：岩石学地球化学研究センター（フランス）、ケンブリッジ大学（イギリス）、ペンシルバニア州立大学（アメリカ）において客員研究員を務めていて、国際的に活躍している研究者です。

本センター滞在期間は、エチオピアと極東ロシア、および東北アジア沖深海底に分布する 3 種類の「巨大火成岩岩石区（Large Igneous Provinces: LIPs）」の比較研究を行います。これら巨大火成岩岩石区は、地球史の中で複数の活動期を伴い、その時期には地球上の生命大量絶滅を引き起こしたほどの超巨大な火山活動を言います。その活動の痕跡は、大量の溶岩流として、極東ロシア、エチオピア、東北アジア沖の北西太平洋海底の各地域にも残されています。およそ三百万年前から現在に引き続いて活動するエチオピアのもの、およそ一億四千五百万年前の北西太平洋のもの、およそ二億五千万年前の極東ロシアのもの、それぞれの岩石から読み取るマグマ組成を比べることで、地球の進化と発達過程について議論を進める計画です。

（平野直人）

●客員教授

フグジフ（胡格吉夫）

フグジフ（胡格吉夫）教授は、中国内蒙古自治区庫倫旗のご出身で、中央民族学院（現・中央民族大学）で学士・修士課程を修了後、内蒙古大学大学院で博士号を取得された。中央民族大学蒙古語言文学系で講師・副教授を経て 2004 年に教授となった。現在蒙古語言文学系党総支書記も勤め、また中国蒙古文学学会理事でもある。

同大蒙古語言文学系は、少数民族モンゴル族が居住する中国で、モンゴルに関する人文学研究の中心の一つで、2014 年に東北アジア研究センターと部局間学術交流協定を締結した。本センター教員による同系での講演や同系から本センターへの学生派遣など、研究教育交流が進められている。今回のフグジフ先生の来仙は、同系からの推薦によるものである。

フグジフ教授の専門はモンゴル民間文学の研究で、『蒙古謎語研究』（2001 年）、『蒙古民間文学芸術形象研究』（2004 年）など、多くの著作・論文がある。編著書『蒙古謎語大全』（1993 年）は 1 万余のモンゴル語のなぞなぞ（謎語）を収録し、優秀蒙文図書二等賞に選ばれている。また教授は、モンゴル文教材として『蒙古民間文学導論』の執筆に加わり、これは 2002 年内蒙古自治区優秀大中専蒙文教材一等賞を獲得している。

モンゴル人は、古くから豊かな口承文芸を育んできた。英雄叙事詩や民謡、頌詩などはモンゴル国・中国はもちろん、欧米でも古くから関心を集め、研究されてきた。フグジフ先生の研究も、英雄叙事詩やなぞなぞに関するものが多い。モンゴル研究では歴史・言語の研究でも口承文芸に関する知識が不可欠であり、学際的な交流が期待されるところである。

（岡　洋樹）

BOOKS 著書紹介　センター関連出版物

東北アジア研究センター叢書第56号

広島市立中央図書館蔵 浅野文庫漢籍図録

磯部彰 編著
A4版 212頁 2015年11月刊

本書は、広島市立中央図書館所蔵の旧広島藩主浅野家所蔵漢籍資料集である。内容は、研究篇と図録篇の二つに分かれる。研究篇は浅野家による和漢書蒐集の歴史、広島藩の藩校の蔵書とその特徴に関する研究、代表的稀覯本の提要から成る。図録篇は、宋元版本と明刊本、朝鮮本、日本古活字本漢籍の封面や刊記･巻首など、各書籍の特徴を示す書誌図版から成る。

戦国大名家であった浅野家は、豊臣家から徳川家への政権移行の過程で重要な役割を果たした。その政治的動向は蔵書の内容、つまり、五山僧との関係を物語る宋版本、大坂へ出仕していた状況が推測される古活字本、そして徳川家と縁戚を持つことによる明刊『西遊記』所有などの特殊な漢籍から窺うことが可能である。そのため、本書は広島市立中央図書館の浅野文庫目録漢籍篇の補完的な図録であるとともに、東北アジア地域文化の一端である出版典籍文化をめぐる共同研究の報告書でもある。

（磯部　彰）

東北アジア研究センター報告18号

シベリアからの声：民俗写真展示プロジェクト記録と調査地からのメッセージ

高倉浩樹、千葉義人 編
B5判 59頁 DVD付 2015年11月刊

2012 年 3 月 22-24 日にシベリアのトナカイ牧畜民の村において行われた調査写真を中心とする展示プロジェクトにかかわる記録集である。90 年代初頭に日本人研究者の目に映った人々の日常光景が、約 15 年を経て、現地で披露されたのである。写真は村の博物館に寄贈されたが、それは研究資料としての写真を、ローカルな記憶遺産化することを試みるものでもあった。本書には、その企画の意図や準備以外といった展示のメイキングと、展示を行った際に収集した、現地の人々の感想及び仙台市民へのメッセージの記録（露文及び日本語訳）が含まれている。このような取り組みは、映像を用いて異文化交流を実践する応用映像人類学だといえる。付録としてメイキングに関わる動画が日英露の字幕で用意され、DVD も付けられている。本報告書は 2012 年度に行われた東北アジア研究センター共同研究「協働による展示実践を通した人類学的方法論の探求」に関わる成果の一つである。

（高倉浩樹）

東北アジア研究センター報告19

東アジアの世界遺産と文化資源

瀬川昌久 編
B5判 124頁 2015年12月刊

本書は、東北アジア研究センターが平成 27 年 2 月 14 日に開催した公開シンポジウムの成果報告書である。本シンポジウムでは、東アジア諸国の世界遺産や文化の資源化に関連し、文化人類学、建築史、地域計画学、人文地理学、文化景観研究など多様な分野の専門研究者の方々にお集まりいただき、それぞれの御専門の立場からの御報告をいただくとともに、各国間あるいは諸事例間の比較と、総合的な考察を行った。

事例報告者は、高山陽子（亜細亜大学国際関係学部准教授）、三浦正幸（広島大学大学院文学研究科教授）、姜東辰（韓国慶星大学校都市工学科教授）、太田秀春（鹿児島国際大学国際文化学部教授）、波多野想（琉球大学観光産業科学部准教授）の５名、またコメンテーターは大塚直樹（亜細亜大学国際関係学部講師）、羽生冬佳（立教大学観光学部准教授）、稲村務（琉球大学法文学部教授）、藪田貫（関西大学大学院文学部教授）の４名である。

（瀬川昌久）

東北アジア研究センター報告20

伝統的モンゴル語辞書資料集

栗林 均 編
B5判 352頁 2015年12月刊

18 世紀清朝の時代には、「清文鑑」とよばれる一連の官製満洲語辞典が編纂・出版された。それらの満洲語辞典の中には、清朝の公用語のひとつであったモンゴル語の対訳が含まれるものが少なくない。近代モンゴル語の辞書は、これら「清文鑑」を出発点として発展してきた。

本書は、モンゴル語が採録されている「清文鑑」をはじめとして 18 世紀の主要な 5 種類の辞書の序文等を影印として集めたものである。それらは、『御製満蒙合璧清文鑑』(1717)、『御製満蒙合璧清文鑑（満洲文字表記）』(1743)、『御製満珠蒙古漢字三合切音清文鑑』(1780)、『三合便覧』(1780)、『蒙古トド彙集』(1791) である。これらはいずれも影印の形で初めて公刊されるもので、モンゴル語辞書の歴史だけでなく、モンゴル語の言語資料としても貴重な価値をもつものである。本書は、東北アジア研究センター共同研究「伝統的モンゴル語辞書の研究」の成果の一つとして刊行された。

（栗林　均）

海外出張のトラブル ―その傾向と対策―

栗林　均

中国国際航空 乗り継ぎ事情

昨年（2015 年）7 月、中国の内モンゴルの中心地フフホト（呼和浩特）市に一カ月間滞在した。フフホト市は人口 230 万人、北京から北西に約 400 キロ、飛行機で 50 分足らずの距離にある。日本からの直行便は少なく、たいていは北京空港で乗り継いで行く。

昨年の出張では、往路で羽田発北京行きの出発が遅れて、フフホト行きの乗り継ぎに間に合わず、北京で 1 泊した。復路ではフフホト発北京行きの便が遅れて、羽田行きの乗り継ぎに間に合わず、またもや北京で 1 泊するはめになった。行きの飛行機が遅延して丸一日の足止めを食らったのだから、帰りで同じことが起ることはよもやあるまいと考えていたのは、何の根拠もない安心感だった。いつ起こるかわからないもの、いつ起こってもおかしくないのが災難なのである。

外国で飛行機の発着が遅れて当日の乗り継ぎが出来なくなったことはこれまで何度も経験している。飛行機の遅延などはトラブルの内に入らないとも思うし、「トラブルを楽しむくらいでないと」をモットーとしていても、実際は成り行きに任せてなんとなくやってきただけのような気もする。白状すれば、私はパスポートや搭乗券を胸ポケットに入れて持ち歩く類の人間である。

思い返してみると、これまでの飛行機の遅延では乗客は団体で動いて（連れまわされて）いたので、一緒について行けばよかった。今回、特に帰路では中国の国内線（フフホト－北京）から国際線（北京－羽田）への乗り継ぎは私一人だけで、それに対する航空会社の対応がどのようなものか初めて思い知らされることになった。

フフホトから北京に向かう乗客の中で、国際線への乗り継ぎ者がいるのだから、航空会社（中国国際航空）も気にかけてくれているであろう、というのは甘い期待であった。いつまで待っても乗り継ぎに関する案内は何もない。さすがの私も客室乗務員を呼んで「この便に乗り継ぐ予定なのですが」と尋ねてみた。しばらくしてやってきたチーフが告げた言葉は「あなたの乗る予定の便に遅延はありません」。それって「あなたを置いて行きます」ってことね。ま、それは仕方ないとしてその後のフォローが何もない。再び客室乗務員を呼んで「私はどうしたらいいですか？」と聞いたところ、「空港に着いたら緑色のジャケットを着た係員について行って下さい」という頼もしい答えが返ってきた。

空港では係員が私を航空会社の事務室まで案内してくれて、事務室では宿泊施設と翌日の代替便のチケットを準備してくれるのだろう... というのも甘すぎる期待だった。係員が私を連れて行って指さしたのは総合案内所（Information）で、言った言葉は「あそこで（どうしたらいいか）尋ねて下さい」だった。これで、振り出しに戻る。

案内所では「航空会社のオフィスに行け」と教えられたが、たどり着いたのは航空会社の航空券発券窓口で、そこではホテルに行くバスの乗り場を教えられた。ようやくバスに乗って、さて「いつ発車するのか」と聞くと「人が一杯になってから」。何十分か後に満員になったバスは 1 時間以上走ってホテルに到着。午前 10 時にフフホトの空港でチェックインしてから、12 時間以上が経過していた。ホテルの食堂ではワンタン麺かゆで餃子かの選択でどんぶり一杯の食事が提供された。食事を終えて部屋に戻ったのが午前 0 時過ぎ。翌日空港へ向かうバスは午前 5 時に出発するという。

翌朝、バスで空港に着いても、航空会社は何をしてくれるわけでもない。代替便の航空券を確保するために、ふたたび航空券発券窓口に並ぶ。長蛇の列は遅々として進まず、1 時間、2 時間と時間は非情に過ぎてゆく。行きの飛行機に乗り合わせた女性が「私は代替便の航空券をもらえるまで 3 日かかりました」と言っていた言葉がやおら現実味を帯びて思い出される。さらに待つこと数十分、窓口への割り込みはなかなかやれない私であるが、係りの男性が席を立って窓口を離れようとした時、パスポートを掲げながら駆け寄って「ミスター、ミスター！」と呼び掛けた。男性は無視して通り過ぎたが、傍らの香港行きのチェックインカウンターに座っていた女性が「私に貸しなさい」と助け船を出してくれた。「窓口でもないあなたがなんで？」なんてもうどうでもいいことだ。「成田行きなら 1 時間後にあります」という言葉に一も二もなく飛び付いた私だった。あのまま列の中で時の流れに身を任せていたらホテルに出戻りか空港のロビー宿となったことだろう。

なんとか成田空港に到着して、預けたスーツケースが出てくるのを待っている時、近くの男性が携帯電話で話している声が聞こえた。「昨日、到着が遅れた人たちに席を取られて、予定の便に乗れなかったんだよ！」まったく災難はどこにあるか分からない。

活動風景

タンザニア再訪、ダルエスサラーム便り2016

東北アジア研究センター教授　辻森　樹

2012 年度以降、科学研究費基盤研究（B）の研究課題「大陸地殻の改変と構造侵食の実像：タンザニア地塊外縁造山帯約 15 億年間の変遷解読」の一環として、タンザニア西部の高地において野外地質調査を過去 3 シーズン行った（図 1）。その研究課題は無事終了したが、幸いにも 2015 年度から新規に基盤研究（B）の研究課題「現行型沈み込み帯出現の地質学的証拠：古原生代、高圧中間群変成帯の総合研究」が採択され、再びタンザニアの地質に挑むことになった。今回、赤道直下のダルエスサラームからタンザニアでの「活動風景」を寄稿させて頂く。

真冬の仙台を出発してから 30 時間を越える長旅の末、約 1 年ぶりにアフリカ大陸に降り立った。Jambo ！（スワヒリ語で「こんにちは！」）時差（マイナス 6 時間）もさることながら、気温摂氏 35 度、湿度 70%という熱帯性気候に体を順応させるのは容易ではない。ダルエスサラーム市内の幹線道路の交通渋滞は深刻である。そのためジュリウス・ニエレレ国際空港からの車移動は未舗装の裏道を抜けながらということになる。ダルエスサラームはこの国最大の都市（旧首都）ではあるが市街地でも未だ未舗装道路が多い。都市部でも木炭が家庭用燃料なのだ。毎度のことながら借り上げたトヨタ・ランドクルーザー 70 系には冷房などなく、窓全開の自然通風しかない。4 度目となると照りつける日差しと未舗装がゆえの砂埃混じりの熱帯の風を感じながらも、カオスに思える喧騒の非日常的な光景も懐かしさを持って受け入れられる。ところで、この国の幹線道路には T7・T3 といった標記がある。昨年までと違い、それを見て仙台の地下鉄東西線の駅番号を思い浮かべてしまう（ただし、「T」は Trunk Road の「T」）。

ダルエスサラームでは可能な限りいいホテルに宿泊することにしているが（安全はお金で買う！）、部屋にはたいてい夜行性の蚊が 2、3 匹潜んでいるので、マラリアにかかりたくなければ抗マラリア薬だけでなく、天井から吊された蚊帳でベッドをすっぽり覆って寝るようにしなければならない。こういう国に日本から 1 人で渡航し、現地の研究協力者らと調査チームを組織して成功を収めるためには、常にサクセスレベルを意識し、限られた時間・条件の中でフルサクセスになるよう自己暗示をかけて行動するしかない。

図1. GoogleEarth に示した移動経路（水色）

図 2. ダンガニーカ湖東岸地域の光景

図 3. ダルエスサラーム大学にて（2014 年）

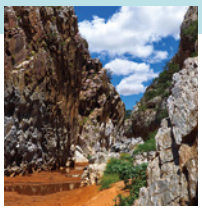


図 4. 古原生代の広域変成岩の露頭

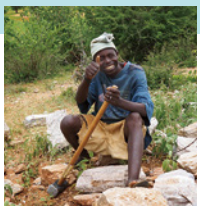


図 5. 現地で協力を得た村人

図 6. 調査中に遭遇する野生動物

さて、どうしてタンザニアなのか？— 45.5 億年の地球の歴史のなかで太古代と呼ばれる時代（40 ～ 25 億年前）にプレートテクトニクスが起動し、地球表面を覆うプレートが収束する（沈み込む）場所で原始海洋地殻が部分的に溶融することで、地球表層の原始地殻は花崗岩質の大陸地殻と玄武岩質の海洋地殻に化学分別した。現在の地球表層部の大陸地殻は太古代から古原生代（40 ～ 25 億年前）の時期に形成した古い地殻の一部を保持し、2 億年より若い海洋地殻とは化学組成と形成年代に関して極めて対照的な存在である。この地殻の二極性は、地球と他の地球型惑星との決定的相違であり、「地球」固有の内部進化と表層環境に複雑性を与えた要因の一つである。プレートテクトニクス起動にともなって現在の東北日本太平洋側のような構造場（ここでは「現行型沈み込み帯」と呼ぼう）が新原生代（10 ～ 5.4 億年前）までのどこかのタイミングに出現する。「現行型沈み込み帯」は島弧火成活動によって大陸地殻物質を再生し、構造侵食は新旧の大陸地殻物質を下部マントルへと循環させ始めた。その結果、固体地球の化学分別様式に多様性が生まれ、さらに化学分別そのものが大きく加速した。ところが、現行型沈み込みテクトニクスの開始を裏付ける低温高圧型の変成岩の出現の地質記録は約 8 億年前までない。「地球史において現行型沈み込みテクトニクスはいつ始まったのか？それはどのような場で始まりどのような環境であったのか？」太古代の大陸地塊を核に発達した古期造山帯 (太古代中期～新原生代) の広域変成帯（図 4）から現行型沈み込みテクトニクスの証拠を見出し、その実体を解明することは地質学に残された最重要課題の一つである（東北アジアとの研究の関連についてはまたの機会に触れたい）。

さて、ダル滞在の初日も夜 11 時を過ぎてさすがに眠くなってきた。明日から西部の高地へ移動する。「現行型沈み込み帯出現の地質学的証拠」を確定的にするための野外調査がはじまる。電気、水道などの基本インフラが存在しない地域ではあるが、極めて貧しいなかに人々の輝いた笑顔と壮大な大自然がある（図 5・6）、そして、なによりも知的好奇心が掻き立てる夢がある。Lala salama（スワヒリ語で「おやすみなさい」）

編集後記

「海外出張のトラブル」、好評につき続編をお送りします。今回の拙文は 2 月 19 日に 7 月と同じルート（羽田－北京－フフホト）で移動中の北京空港で当時を思い出しながら書き始め、フフホトに着いてから入稿しました。今回は、幸い行きも帰りも遅延はありませんでしたが、羽田空港でレンタル WiFi を借り、通信手段を確保して臨みました。辻森先生からは出張先のアフリカ、タンザニアから原稿をお送りいただきました。センターの研究活動のグローバル化を実感します。（栗林　均）

東北大学 東北アジア研究センター ニューズレター 第 68 号　2016 年 3 月 25 日発行

編集　東北アジア研究センター広報情報委員会
発行　東北大学東北アジア研究センター　〒 980-8576 宮城県仙台市青葉区川内 41
TEL 022-795 - 6009　FAX 022-795 - 6010　http://www.cneas.tohoku.ac.jp/

植物油インキを使用し、環境にやさしい水なし印刷方式を採用しています。